

『地の上で平和が』（Ⅱ歴代誌 30:10～20・ルカ 2:14）

【開会聖句】

ルカ

2:14 「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」

<序論>

・南ユダの歴史には 20 人の王が登場しますが、「Ⅱ歴代誌」が特に多くの頁を割いているのは 5 人の王についてです。それは、アサ、ヨシャファテ、ヨアシュ、ヒゼキヤ、そしてヨシヤなんです。今回はヨアシュ王を取り上げました。そして今回はヒゼキヤ王に注目したいと思っています。

<本論>

1. 原点に立ち返ったヒゼキヤ

今年の 8 月頃に「イザヤ書」からお話ししましたが、その時にもヒゼキヤ王について三度ほど取り上げました。もちろん、今日とは全く別の話でしたが、今日の箇所には、彼が、ソロモン王以来、長らく行われていなかった過越の祭りを復活させたことが書かれています。ヒゼキヤの父は悪王と言われたアハズでしたが、ヒゼキヤは紀元前 715 年に 25 歳で王になると、まず、いの一歩に、荒れ果てた主の宮（ソロモンの神殿）を修復することから始めます。

『彼はその治世の第一年の第一の月に、主の宮の戸を開いてこれらを修理した』（Ⅱ歴代 29:3）。

そして、父の時代にあった偶像を取り除き、すべての民に感謝のささげ物を献げるように命じます。既に、北イスラエルは、その 6 年程前にアッシリアによって滅ぼされ、南ユダにもその脅威は迫っていました。と言うか、この頃の南ユダは、言わば、アッシリアの属国状態にあったようです。ですから、当然のようにアッシリアから異教的な文化や偶像が入り込んでいたものと思われます。ヒゼキヤ王も、即位した当初は、やむなく親アッシリアの姿勢を見せていたようですが、そのような中で、彼はまず、自分たちの原点に立ち返ると言うか、イスラエル民族のアイデンティティを取り戻すことから始めたんです。

2. ヒゼキヤからの急使

そして、今日の 30 章 1 節には、ヒゼキヤが、その修復されたエルサレム神殿で 200 年以上途絶えていた過越の祭りを行うので、皆、集まるようにという使いを送り、ま

た、エフライムとマナセ（北イスラエルの残留民）には手紙を書いて呼びかけた、と記されています。先程も申し上げましたように、既に北イスラエルは国としては滅びていました。アッシリアは北イスラエルの指導者たちを捕囚として連れて行きましたが、その数は全人口の 20 分の 1 程度であったと言われていています。ですから、大部分の人たちは残されたんですね。彼らは、精神的にも肉体的にも、まさに羊飼いのいない羊のような状態にあったと思われます。そんな彼らに向かってヒゼキヤ王は、「あなたがたもエルサレムの神殿に来て、私たちとともに過越の祭りを祝おう！」と呼びかけたのです。もちろん、そこには政治的な意図もあったかもしれませんが、ヒゼキヤ王の同胞への熱い思いは 6～9 節にある急使たちのことばを読めば伝わってきます。9 節だけご覧ください。

『もしあなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたの兄弟や子たちは、彼らを捕虜にした人々のあわれみを受け、この地に帰って来るでしょう。あなたがたの神、主は恵み深く、あわれみ深い方であり、あなたがたが主に立ち返るなら、あなたがたから御顔を背けられることはありません』(Ⅱ歴代 30:9)。

その結果はどうだったのでしょうか？皆がヒゼキヤの呼びかけに応じたわけではありませんでした。10 節には、急使たちを笑いものにして嘲る人々もいた、とあります。しかし、11 節。アシェル、マナセ、およびゼブルンの一部の人々は、ヒゼキヤの呼びかけに応じて、へりくだってエルサレムに上って来たんですね。

## <結論>

そして彼らも過越の祭りを祝うわけですが、ここで一つの事件が起こります。

『民のうち大勢の者、エフライムとマナセ、イッサカルとゼブルンの多くの者は、身をきよめずに、しかも、記されているのとは異なったやり方で過越のいけにえを食べてしまった』(Ⅱ歴代 30:18a)。

つまり、モーセの律法に違反してしまったんです。しかし、

『それでヒゼキヤは彼らのために祈った。「いつくしみ深い主よ。彼らをお赦してください。彼らは聖なるもののきよめの規定どおりにいたしませんでした。心を定めて神を、彼らの父祖の神、主を求めています。」主はヒゼキヤの願いを聞き、民を癒された(同 30:18b～20)。

イエス様は、取税人や罪人たちとともに食事をしている、と自分を非難するパリサイ人に向かって、次のように言われました。

『『わたしが喜びとするのは真実の愛、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。』(マタイ 9:13)。

それは、神が喜びとされるのは、私たちが規定や形式を守ることではない。そうではなくて、私たちの真実の愛、真心から神様にお応えしたいという思いをこそ神は喜ばれるの

だ、ということですね。

今年ももうすぐクリスマスがやって来ます。コロナの中、本当に厳しい状況が続いていますが、私たちも、真心から神様にお応えするという、その心を大切にする者でありたいと願います。そして、あのヒゼキヤ王がそうであったように、一人でも多くの同胞、仲間たちとともに、イエス様の御降誕をお祝いしたい、と切に願います。

「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」(ルカ 2:14)。